

【用語】寒苦—寒気の苦しみ 聚斂—とりあつめること 獅子休—蚕は四眠をしながら成長・脱皮するが、その初眠のこと 凌たる—たえしのぶ 竹休—蚕の二眠のこと 舟休—蚕の三眠のこと 庭休—蚕の四眠のこと 上り—四眠からさめた蚕が葉を食べなくなり、繭作り直前となること まぶし—藁などで編んだもので、熟蚕を入れ繭を作らせる 下臈—身分の低い賤しい男 仕おふ—しおう、成就する、なしとげる

【解説】江戸時代中期以後、養蚕業の著しい発展を背景に、養蚕指導書が全国各地で刊行されたが、そのうち最も古いもの一つが、正徳二年（一七二二）十一月に江戸の書林山崎屋又兵衛によって発刊された馬場重久の「蚕養育手鑑」である。重久は群馬郡北下村（北群馬郡吉岡町）に生まれ、医業のかたわら農事の改良に尽くし、馬場鋏という手鋏を発明しているほか、陣場桑の創始者としても知られている。

ここに掲載したのは自序および序論の一部にすぎないが、全体の内容は一一項目からなり、蚕種の選択から繭になるまでの飼育上の注意事項や蚕具に至るまで、詳細に記述している。飼育法は単に自然のまま飼うのではなく、一部火力を使用する点に特徴があり、元禄十四年（一七〇二）に京都で出版された野本道玄著『蚕飼養法記』の説く天然育に対し、技術面で新たな一石を投じるものであった。注目すべき内容は、経営面について、必要であれば「桑も購入し、人を雇って経営すべきである」とし、また養蚕を「渡世第一の益なるべし」と説いていることである。また同書は、従来の天然育と奥州で開発された温暖育の両方の長所を活かした飼育法として全国的に高く評価され、田島弥平の「養蚕新論」（明治五年初版）が世に出るまで、古典的な養蚕指導書として幾たびか再版されている。ちなみに、本文の末尾には「北下村の高橋鹿造が発起し、持本を五〇〇部増刷して各地の篤志者に分配する」と記されているので、これは明治二十九年（一八九六）の再版本であろう。